

JAELE Newsletter

上越英語教育学会通信

The Joetsu Association of English Language Education

October 24, 2020

No. 23

「修了後、そして近況」

東京都立小川高等学校長
飛田牧弘（平成4年度修了生）

平成3年4月から2年間、英語コースに在籍していた飛田牧弘です。上越の暑い夏に大学院入試を受験したのは教職に就いて8年目、公立中学1校と都立高校1校における自分の英語指導の取り組みを理論的に考えてみたいと思っていた頃で、幸いにも東京都から上越教育大学へ派遣される機会が与えられました。その2年間は、英語コースの先生方から親身にご指導いただき、また全国から集まってきた院生仲間にも恵まれて、院生生活に加えて私生活においても、充実した日々を送ることができました。あらためてお礼を申し上げます。修士論文の作成は、加藤雅啓先生に指導教官をお願いし、情報構造の観点から日本の英語教育を考察いたしました。情報構造は『目から鱗』の理論でしたが、今では、予備校の講師が高校生を相手に、新情報・旧情報を論じることが多く、隔世の感があります。当時の思い出を家族に語ると、子どもたちから「お父さん、リア充だったんだね」と言われて、「確かにそうだった」と感慨深く昔日を振り返りました。

2年を経て学校現場に復帰し、公私にわたり多忙な日々にかまけて、せっかくご指導いただいた研究活動からは縁遠くなりました。今でも、修士論文の提出が間に合わない焦っている自分を夢で見ることがありますが、不完全燃焼に終わった研究活動を無意識のうちに気にしているのかもしれない。それでも、教壇に立つことにこだわり、管理職選考へのお誘いは固辞し続けました。そして、平成15年度に、東京都教育委員会が『東京教師道場』という研修制度を始め、私

も助言者の一人として他校に出かけては、若手教員を相手に“模範”授業をしたり、指導助言を行ったりしていました。教師道場の2年間は、若手教員から触発されることも少なくなかったのですが、勤務校を離れて活動している自分に違和感を抱くようになり、思案した挙句、主幹教諭選考を志し、数年後には管理職選考を受験することになりました。(平成19年度の学校教育法の改正で『指導教諭』のポストが創設されましたが、東京都では平成25年度と設置が遅れました。もう少し早ければ、指導教諭の道を選んだかもしれませんが、これも運命です。)

今、管理職を目指した根源的な理由を探ってみると、長い教員生活の中で出会った管理職の先生方の存在があったのかも知れません。普段は気さくに教職員や生徒に話しかける一方で、言うべきことは毅然と発言する先生、朝礼台の上に立つだけで、ざわついていた生徒が静まり返った先生、外部からのクレームに対して、若い教員を懸命にサポートしてくれた先生、「どんな立場に立っても、授業ができなければだめだ」と若手に言い聞かせていた先生、校長室の机の上に書籍を山積みにして、全体集会で含蓄のある講話をされていた先生など、お世話になった管理職の先生方の年齢に自分も近づいてきて、その存在に近づきたいという『親を慕う子』のような心境になったのかもしれない。

副校長になってからの7年間は新たな挑戦の連続でした。職員室の“担任”としての校内業務に加えて、グローバル化やAIなど情報技術革新を背景に、次期学習指導要領に基づく教育課程の検討、外部検定・記述式問題・調査書の様式変更・JAPAN e-Portfolioなどの高大接続改革への対応、新しい学力観の下でのアクティブラーニングの推進といった全国的な取り組みに加えて、オリンピック・パラリンピック教育や、都立高校入試のマークシート化(答案開示を含む)など、東京ローカル的な課題もありました。そして、今春、国内でも新型コロナウイルス感染症が発生拡大し、その対応のかたわら、異動の準備を進めることになりました。

4月1日、臨時休業で閑散とした現任校の校長として着任し、同様に昇任したばかりの副校長と経営企画室長(事務長)のトロイカ体制で、学校経営の“權”を漕ぎ始めることになりました。3人とも異動直後だったので、所属教職員は初対面の人ばかり。さらに、感染症拡大防止等で自宅勤務が原則となっていたため、名前と顔が一致するまで長い時間を要しました。(今でも、マスクを外した素顔を見て、想像力の限界を実感することがあります)その一方で、入学式をはじめとする学校行事の中止や延期、長期にわたる臨時休業や分割登校、学習課題の発送やオンライン教育の着手、消毒等の感染症防止対策、感染の疑いがある学校関係者への対応などに追われました。今後は、感染症に配慮した都立高校入学選抜業務や、感染症の影響が及んでいる就職進学環境を巡り、的確で柔軟な進路指導が求められるところです。校長としてリーダーシップと判断力を発揮しなければなりません、『感染症防止』と『学びの保障』、『感染症防止』と『熱中症予防』は、マニュアル・シフトの坂道発進を彷彿とさせるのが実感です。

臨時休業は5月26日まで続き、がらんとした学校に勤めながら、「学校とは何だろう？」と自問する日々でした。そして6月29日、臨時休業に続いた分割登校も終わって、クラス全員が一斉登校した朝、校長室まで聞こえてきた、友との再会を喜ぶ生徒たちの歓声を、今でも忘れることはできません。今後、オンライン教育が進展すると予想されますが、教職員と生徒が**集って**行われる教育の営みは、決して色褪せることはないでしょうし、コロナを機に学校の存在意義が再認識されたのではないのでしょうか。校長として、生徒一人ひとりが「入ってよかった」と、教職員一人ひとりが「働いてよかった」と、保護者一人ひとりが「入れてよかった」と思ってもらえ

るように、そして地域の方々に本校の存在を誇っていただけるように、一丸となって笑顔あふれる学校創りに取り組んでいきたいと願っております。

最後に、現在の私と英語の関係です。研究活動とは無縁となっしまい、英語教育に関する研究動向も不案内です。グローバル時代にかかわらず、長年、海外に出かける機会もありませんでした。しかし、高校生の頃に英語教育を志し、50歳過ぎまで教壇に立つことにこだわり、定年退職まで学校現場に身を置くことになった私ですから、授業への愛着は衰えていません。校長の職務のかたわら、授業や講習を担うのは難しいですが、大学受験英単語集を活用して、「千円で人生が変わるのはこれで最後だぞ」と挑発して、『校長賞争奪ボギャビル・マラソン』を主宰し、問題作成から成績優良者宅への報告まで、臨時休業の影響を受けた高校3年生の底上げを目指して、取り組んでいます。また、休日に実施している予備校講師による英語講習のサポートとしても動き、授業の感覚を保とうとしています。私自身、英語に触れる機会は限られていますが、朝日ウィークリーの『英文ライティング道場』への投稿だけは、生涯続けたいと心に期しています。



小野山山頂から望む筑波山(茨城県土浦市)

学びの場

大学院 1 年 学校教育深化(文理深化英語)コース

石井 貴子

「もう一度学びたい…」

数年前から強く思うようになりました。現職教員としての日々は、生徒指導や部活動指導に追われる毎日で、教材研究に当てる時間はかなり少ないものでした。私は何のために教職についたのだろう。生徒と関わり悩みを聞いたり授業をしたりすることはとても充実していることには変わりはありません。でも、心にポツカリと穴が開いているのです。

私は以前、在外教育施設日本人学校で派遣教員として勤務していました。そこで、様々なルーツを持った子どもたちと出会いました。この子どもたちはどうやってことばを獲得しているのだろう。2、3カ国語を操る子どももいれば、自分にとっての第一言語は何なのかと思っている子ども、ドイツ語は話せるけれど英語は話せないなあ、という子ども。本当にたくさん子どもたちに出会いました。日本にずっといたのならば気がつかなかったことだろうと思います。日本の生徒に、「日本では英語が話せなくても生きていける。何で英語を勉強しなければならないの。」と何度も質問されたことがあります。その質問に何度言葉に詰まったかわかりません。しかし、世界には英語を話せることで、仕事につける国がたくさんあるということ、英語が話せると世界がうんと広がるということを在外教育施設に勤務して学びました。帰国してからの毎日は、冒頭で話した通り、日本人学校での日々を思い出すことができずでした。しかし、3年たち、やはり、もう一度しっかり学び直したい。「言語」に関わる教師である以上は、しっかりと言語教師としての資質や能力を身につけた教師でありたいと強く思うようになりました。念願叶い、ここ上越教育大学大学院で学ぶことができています。コロナ禍での授業は、私が思い描いた授業とはかけ離れていました。オンラインでの授業は、私にとって初めての経験です。自宅の通信機器がうまくつながらず、苛々する経験もできています。課題が出るたびに、宿題に追われる生徒の気持ちわかります。諸先生のオンラインでの授業の展開の仕方も大変参考になり考えさせられます。それらを通して、改めて対面での授業が何と素晴らしいことであるか身をもって経験できています。人の温もりやあたたかさをもこの半年を通して改めて感じることもできています。また、日本海側という気候やたくさんの美味しい食べ物の魅力を知ることもできています。

ここでの2年間の学びを、現場に戻ってから子どもたちに還元する事が私の使命だと今強く感じています。この機会をあたえていただいた、茨城県教育委員会を始めとする常陸太田市教育委員会の皆様、所属の校長先生や諸先生の方々に深く感謝しています。

自分のために使うことのできる多くの時間、新しい発見や学びを一つ一つ大切に研究に励んでいきたいと思います。

学びを止めるな！新しい学びへの挑戦

大学院1年 学校教育深化（文理深化英語）コース

山川春奈

大学院に入学してからあっという間に半年の月日が経ちました。全国的に新型コロナウイルスの感染拡大する中で、例年とは違う形式でのスタートとなりました。大学院でも前期はほとんどの授業がオンラインで開講される、いわゆる「リモート授業」が行われ、新しい教育の場が提供されました。日々変化する状況で柔軟に対応することが求められ、慣れない上越での大学院生活に不安を抱きながらもオンラインでの学びに新たな可能性を感じました。ここでは半年間を通して感じたことをお話しさせていただきたいと思います。

近年のグローバル化に伴い、英語がますます重要視されており、日常で英語を使う機会も増えていくことが予想されています。教育の場面でも異文化間での交流を視野に入れたコミュニケーションを行う活動が増えていくと思います。そのような背景から、大学院では異文化コミュニケーションについて研究したいと思い、それに関連したゼミに入りました。先生や先輩方との議論を通し、様々な知識を身につけたいと入学前から大学院での学びを心待ちにしていたことを覚えています。

しかし、新型コロナウイルスが流行し4月には全国に緊急事態宣言が発令されたことを受け、当大学でも休講期間が続き多くの授業がオンラインで開講されることになりました。入学当初思い描いていたものとは大きくかけ離れた大学院生活の幕開けであり、慣れないオンラインでの授業にかなり苦戦しました。議論やプレゼンテーションなど、対面であれば簡単にできるようなことでも、オンライン上だと難しくなったりと、今までとは違う授業の在り方に適応していかなければならず、常に改善点を探し工夫できることを考えていました。そのような状況の中でも、複数の通信機器を組み合わせ、講義の特色に合わせて授業を展開することでオンラインでも十分充実した学びを続けていくことができることがわかりました。プレゼンテーションなど、パワーポイントを使用する授業も通信機器を通して画面共有することが可能であり、対面の時と変わらないような形でできています。もちろん、できることなら例年と変わらない形で大学院生活をスタートしたかったですが、ICTの利用とGIGAスクールの構想が実現されようとしている現代の教育場面で、このような経験ができたことは貴重であったと思いますし、今後に活かせる経験でした。

夏も終わり、もうすぐ秋そして冬がやってきます。コロナウイルスはまだ終息しておらず、状況に合わせて行動を適応させていくことが必要になります。今後、大学院での学びの形がどのように変わっていくかはわかりませんが、その場に合わせしなやかに適応していければと思っています。また、大学生だけでなく、小学生、中学生、高校生も同じような不安を抱えている児童生徒が多くいると思います。この普段とは違う学びの経験を活かし、卒業後現場に出た時に今度起こりうる教育の変化に合わせてながら、児童生徒に「学びの場」を提供していきたいです。その為の準備として、2年間の大学院生活を有意義に過ごしたいと思います。

今年（コロナ）の前期を振り返って

大学院2年 学校教育深化（文理深化英語）コース
三上 博史

今年の前期はコロナウイルスの関係で今まで普通に出来ていたことが出来なくなりました。大学では、対面授業がオンラインに代わり、また教育実習は代替措置で行われることになった。日常生活では、友達や知り合いの人々とカフェで勉強したり、買い物や息抜きに友達とカラオケに行ったり、どこかに出かけるのが楽しみで当たり前だった。しかし、今まで当たり前のように出来ていたことができなくなりました。そのような状況下においても楽しく前向きに過ごすことが必要であった。皆さんもどのように過ごしたらよいのかと考える時が多かったのではないだろうか。私は、このような大変な時期でも思ったより前向きに楽しく過ごすことができたし、学ぶことも多かったと思っている。今回は前期の授業と教育実習代替措置で学んだことについて話したい。

前期は、ほとんどの授業がオンラインで行われた。最初は zoom の使い方に慣れるのに苦労し



たり、メールの数が増えたりと慣れないことや大変なことが多かった。しかし、オンライン授業だから学べたこともある。例えば、授業の課題でグループワークやディスカッションがよく行われていたが、その場合は google document や LINE などを使用してグループ内で情報を共有したりすることができた。また、時間に縛られないため、都合の良い時に内容を確認し、書き込むことができた。また、学部生の英語の授業では、グループプロジェクトやクリエイティブなプレゼンテーションを作成するといった課題が出された。その課題でユニークだったのは、パワーポイントの資料に音声吹き込んで動画のようなものを作ることだった。普段、先生方がオンライン授業で行っているよ

小野山の石割桜(茨城県土浦市)

うなことを求められたので、少し驚いた。しかし、実際にグループで協力しながら作ってみると楽しいものであった。このように、オンライン授業になったことで、今まで敬遠しがちであったテクノロジーに慣れることができたし、使いこなせるようになった。

教育実習では、大学内の代替措置で本来の教育実習のほとんどの内容を置き換えるという形になった。私自身は本来の教育実習とはほど遠いものとなってしまい正直がっかりしていた。しかし、この実習プログラムを振り返ると充実していたと思う。不思議なものである。私のグループでは、ほとんどのメンバーが学部生だった。なので、最初は他のメンバーとあまり話すことはなかった。しかし、時間が経つにつれて、多くのメンバーといろいろな話をしていて気が付くと仲良くなっていた。実習プログラムでは、模擬授業 20 分を 2 回とグループでの道徳授業を 50 分行うというのが目玉だったと思う。模擬授業では、実地よりも長い 20 分という長さで授業を行った。模擬授業の動画の見直し、協議会で出た改善点などを振り返り、より良い授業を作ろうと思い、指導書、学習指導要領、その他英語授業作成に関する参考書を読んで、思考錯誤しながら模擬授業を作った。そして無事に終わることができた。また、学部生は、教師と生徒の人間関係作りや授業の雰囲気作りがうまくいった。理論や知識に基づいた授業作りも大切だが、人間関係や授業の雰囲気作りもうまくできたらいいなと思う。今後は 5 日間の実習校での授業に活かしていきたいと思う。

What brought me to Joetsu University of Education?

大学院 2 年 学校教育深化（文理深化英語）コース
杉本 亜紀

It is only with the heart that one can see rightly; what is essential is invisible to the eye.

「心で見なくちゃ、ものごとはちゃんと見えないってことさ」(The Little Prince より)

私が大学院を志望した理由は、第二言語習得のメカニズムを理解し、理論的に基づいた指導やテストの効果を研究すること。またこれまで実践した英語授業は、生徒の英語力を伸ばし将来のビジョンを描けるものであったのか疑問があったからだ。

また、「あなたは授業でどんな力を身に付けたいですか？」授業アンケートに生徒たちは、「英語で会話する力」「たくさん単語を覚えて、文を書けるようになりたい。」など英語を使った活動に意欲的であった。「他国の文化や生活様式を知りたい、共に話したい。」自分も英語を学びたいと思う理由であった。授業の中でどれだけその希望を叶えられただろうか。本当に大切なことは何か考えさせられ、そして大学院で学ぶことを決めた。

大学院での学びや仲間との意見交換は自分の教育観や教師としての意識を変えさせてくれた。母語や第二言語がどのように獲得されるのかという理論体系や第二言語を習得する上でどのような指導が必要であるのか、英語教育の歴史とともにその指導法のメリット、デメリットを学び、自分があるべき教師像を模索した。さらに、異文化間でのやりとりで生じる差異や類似点を学び、他者と円滑にコミュニケーションを図るために、発話ややりとりの展開を通して、他者を尊重し

つつ自分の意向を伝えるスキルの重要性を理解した。また、一つの目標を達成するために、他者と協力、仕事を等分、情報共有、マナーある建設的な学び合いを実践形式で学んだ。授業の中で「主体的・対話的で深い学び」を生むは必要となる理論と実践力だ。そして、教室で外国語として学ぶ英語は、なぜ学ぶのか、世界情勢や社会的問題、将来のビジョンとどうつながるのかという動機づけが、自立した学習者を育てるために大きく作用することなどその重要性に改めて気づいた。

If you want to build a ship, don't drum up the men to gather wood, divide the work and give orders. Instead, teach them to yearn for the vast and endless sea.

「船を造りたいのなら、男たちを森に呼び集めたり仕事を割り振って命令したりする必要はない。代わりに彼らに広大で無限な海の存在を説けばいい。」(Saint-Exupery)

私の目指す教師像は、世の中にはまだ知らない素晴らしい世界があり、生徒自身が無限の可能性があると感じられる授業ができる教師だ。そのために必要なことは安心して仲間と英語を使い学び合える環境を作ること。ファシリテーターとして、社会問題に目を向けさせ、解決するためには何が必要なのか、プロジェクトを通して英語で主体的・対話的で深い学びのある授業を展開すること。「見方・考え方」を働かせて、他者はどのような視点で物事を捉えてどのような考え方で思考しているかを理解し、英語を使い持続可能な社会を実現するために自分の考えを世界へ発信する力を育てたい。上越教育大学大学院で学んだ理論と実践を生かし、生徒とともに向上していく教師でありたい。



霞ヶ浦から望む筑波山(茨城県土浦市)

英語教育雑感

妙高市立妙高高原中学校長
重野 準司（平成9年度修了生）

連載第1回

院生生活を振り返って

上越英語教育学会会員の皆さま、この度、中村先生の後を引き継いで、当学会通信の連載を担当させていただくこととなりました平成9年度に修了した妙高市立妙高高原中学校の重野準司と申します。北條先生や飯島先生から依頼を受け、とてもNoとは言えませんでした。不慣れですが、何とか役目を果たさせていただければと思います。温かい目で見ていただければ幸いです。どうぞよろしく申し上げます。

勤務校での初顔合わせ会

私が上越教育大学にお世話になったのは、1996年4月から1998年3月までです。新潟県からの派遣は私ともう1人の2人でした。2人とも、市内の城北中学校に籍をおいていて、4月1日には、当該校在籍院生全員で校長先生からご指導をいただくのがしきたりとなっていました。私は、これから始まる初めての大学院生活、現場を離れて好きな英語の研究だけに没頭できる喜びや期待でワクワク、ドキドキ、胸が膨らんでいました。しかし、給料をもらいながらの大学院派遣ということで、在籍校の校長先生からは厳しい叱咤激励があるものと覚悟していました。また、おっかない顔をした校長先生でしたので、どんな喝を入れられるのかと、ある意味ビクビクしていました。ところが、校長先生から発せられた言葉は、私の予想を遥かに越えたものでした。

校長先生は、次のようにおっしゃられました。「あなた方は今まで中学校の教員として激務に耐えてきたのだから、この2年間は、これまでできなかった家族サービスに徹してください。」と…。私は、この言葉に最初は耳を疑いましたが、間違いなくそうおっしゃったのです。この校長先生の器のでかさを実感するとともに、その言葉を忠実に実行しようと素直に思い、実行しました。ちなみに、二人目の子どもは翌年の3月に生まれました。バンザーイ！！

歓迎会

大学院生になって初めての歓迎会は、割烹「せがわ」でした。高田の本町7丁目にあるこのお店は、伝統的に言語系コース英語の歓迎会場になっていたようでした。もう24年も前の話なので、歓迎会の内容自体はよく覚えていません。ただ、一つ、印象深く今でもよく覚えていることがあります。

歓迎会も終わりに近づき、院生が先生方を2次会に誘う場面がありました。私はたまたま目の前に座っておられた米文学のM先生を2次会に誘う役目で、「2次会へ行きましょう、M先生！」

とお誘いしました。私は、快く受け入れてくださるものと思っていましたが、M先生の反応は、「いや、おれはいいから、君たちだけで行けばいい。」でした。私は遠慮しておられるものと思ひ込み、「いや、先生、そうおっしゃらずに行きましょう。」、と更に追い打ちをかけました。しかし、M先生は、「おれは用事があるから、いいよ。」と言われたので、今思えばしつこかったと思うのですが、その時は酔った勢いもあって、「用事って何ですか」と余計なことを聞いてしまいました。そうしたらM先生は、“It’s none of your business!”と、怒ったようにこの言葉を残して去って行きました。しばらくは何が起こったかわからない状態で、とにかく後味の悪い終宴でした。今でもこの場面は忘れられません。でも、M先生のヘミングウェイの講義はいつも楽しく参加させていただきましたし、直江津の浜でやったバーベキューも良かったです。

テニス

私は、北條先生に修論のご指導をいただきましたが、それだけでなく、テニスでも随分ご指導いただきました。私はテニスにはそこそこ自信があったのですが、先生とやるたびに、少しずつ、しかし確実に、自信を喪失して行きました。

男の私が力を込めて打ち込むショットも、先生は簡単に返してきます。これでもかと、渾身の力を込めて打ち込んでも、ミートのうまい先生は、軽く返してきました。情けない話ですが、私が疲れ果てて、ぜいぜいと肩で息をしているような状況でも、先生はケロッと涼しい顔をしていることがよくありました。あの頃は、大学のコートだけでなく、妙高パインバレー（現 アパホテル&リゾート上越妙高）のテニスコートにも行きました。先生のおかげで研究以外の面でも、充実した大学院生活を送らせていただきました。もうテニスとは随分ご無沙汰ですが、今は使われなくなって、草茫茫々になってしまった大学のテニスコートの脇を車で通過するたびに、荒れたテニスコートに時の流れを感じるとともに、あの頃を懐かしく思い出します。

英 検

大学院を修了して現場に戻ったときに、「おまえは、大学院で2年間、何をやってきたんだ?」と、問われたら、「英検を取りました。」、と胸を張って即答できるように、とにかく意識してやったことは英検1級への挑戦です。好きな英語だけに没頭できるこの2年間なら、この目標が達成できるかもしれないと、内心高を括っていました。しかし、現実には甘くはありませんでした。あの当時、高田の本町通りにジオスという英会話スクールがありました。そこに通って speaking 力を高めました。また、ラジオのビジネス英会話（杉田敏先生監修）で Listening 力と vocabulary 力の増強を図りました。もちろん、それでも1級合格に必要な語彙としては不十分でしたので、専用の単語やイディオムが載っている本を購入して、私なりに集中して勉強したつもりでした。しかし、ダメでした。5回受けて、5回とも1次試験で不合格。まだまだ努力が足りませんでした。ただ、あと4点足りないというときは、本当に悔しかったです。ただ、自信をもって言えるのは、本当に幸せな時間を過ごすことができたということです。大学院生活、最高!

海外派遣

英検について語らせてもらったので、ついでにもう一つ英検に関わることを書かせていただき

ます。私は2013年4月から2017年3月まで4年間、新潟県教育庁の出先機関である上越教育事務所では指導主事をさせていただきました。あの当時、文科省や外務省主催の教員の海外派遣に係る参加候補者の推薦依頼が何度か来ていました。ですが、その候補者としての要件に英検準1級以上の英語力を有すること、という項目がありました。上越地域の中学校で英語を教えている教員は多数いましたが、英検準1級以上の英語力の保持者というと、力はあっても実際に資格をもっている方はなかなかいませんでした。

私自身は、教員になって3校目の学校で準1級を取得し、そのおかげ(?)もあって、2003年に文科省の6ヶ月間の教員海外派遣(アメリカ)に参加する機会をいただきました。給料をいただきながら、県教委と文科省から半分ずつ派遣費用(400万円以上)を負担していただいて、留学のような経験ができるなんて、英語教員としてはこの上ない体験でした。こんなに素晴らしい経験なら、できるだけ多くの方々にしてほしいと思うのですが、先にも述べさせていただいたように、その前には資格要件の壁が立ちはだかっています。みなさん、英語指導の担当者として英検準1級以上、もしくは、それに相当する検定試験を受検、取得しましょう。そうすれば、あなたも海外派遣に行ける、かもしれません。ちなみに私は上記を含めて3回海外へ公費で行きました。ラッキー!

院生仲間

私には、先に述べたとおり、同じ新潟県内から派遣された院生仲間Tさんがいました。とても有能な人で、いつも前向きで、在学中に英検1級も取得していて、いいライバル、目標的な存在でした。彼以外にも埼玉出身のYさん(同じく英検1級所持)、山梨出身のHさん、宮城出身のYさんなど、同じ現職の院生仲間に恵まれ、まさに切磋琢磨できる関係でした。

授業が終わってからは、空き教室を借りて、仲間でpubic speakingの練習をしました。トピックはその都度決めて、とにかく相手に負けまいと、一生懸命話しました。そこで感じたことは、参加したみんな本当にバカが付くほど英語好きだったということです。みんな純粋に英語漬けになる喜びを感じていました。その勉強会をリードしたのは、Tさんと埼玉県のYさんでした。私はついて行くのが精一杯でしたが、何とも言えない充実感があって、楽しかったのも、楽しみながらも、真剣にやったことを覚えています。

Tさんは、新潟市に住んでいたのも、県立教育センターの研修に宿泊で参加したときなどは、待ち合わせて近況を語り合ったりしていました。その後、彼は中等教育学校での勤務をきっかけに高校の教員に転身したので、だんだんと疎遠になってしまい、今はどうしているのか…。元気でいてほしいと思います。

終わりに

この9月から、本校は大学の課題研究プロジェクトで、長谷川ゼミの院生の皆さんの支援を受けています。本多さん、杉本さん、三上さんに毎週本校に来ていただいて、たくさん刺激をもらっています。本多さんとは前任校(十日町市内の中学校)で一緒でしたし、杉本さんの現任校の校長先生とはゴルフ仲間ですので、これもご縁だなあと感じています。

院生の皆さんには、次年度からの新指導要領の全面実施に向けて、話すこと(やり取り)の活動の充実とその望ましい評価の在り方に焦点を絞って、力を貸していただくようお願いしています。

す。この機会を通して、本校の一層多くの生徒に、英語を学ぶ楽しさや分かる喜びを経験させてやることができると願ってやみません。こちらの方も、どうぞよろしく申し上げます。

編集後記

2020年度、新型コロナウイルスの蔓延により諸学校は対応に追われました。現在も、パンデミックの中での学校運営や入試実施のための苦労が続いています。新年度の授業体制もどうすべきか、様々な可能性を検討しなければなりません。学生もオンライン授業の常態化や留学の断念など様々な経験をしています。このような状況下で当学会も例年の夏の学会開催を見送りましたが、それに伴い学会時期に発行していた前期のニューズレターの発行を見送り、後期のニューズレターとの統合版とすることにいたしました。私たちは今回のパンデミックで多くの困難を体験しましたが、これらのマイナスをプラスに転化する力を持ちたいものです。

さて、巻頭原稿をお寄せいただいた東京都の飛田牧弘校長ですが、本ニューズレターの第1号において、英語の指導方法に関する原稿を寄せてくださったのが若き日の飛田先生でした。学会HPのバックナンバーをぜひご一読ください。いつかまた飛田先生に原稿をお願いしたいとずっと思っていました。今回、高等学校長に就任された飛田先生に再び寄稿していただくことができました。大学院時代、飛田氏にあれこれ面倒を見ていただいた編集者としては大変うれしく思います。また、本号から重野準司先生による新連載「英語教育雑感」が始まります。重野先生

は地元新潟県の現職の中学校長として活躍中であり、指導主事としての経験もある方ですので、新潟出身の現職院生の中には面識のある方もおられるようです。第1回は院生生活を振り返る内容ですが、読みながら、遠い昔の自分の院生時代を思い返しておりました。新連載の今後の展開にご期待ください。

(編集委員 H. I.)



霞ヶ浦総合公園(茨城県土浦市)

2020年10月24日発行

発行者 上越英語教育学会

ニューズレター編集委員会

北條礼子(上越教育大学)

野地美幸(上越教育大学)

飯島博之(埼玉県立大学)
